

未来ノート

-202Xの君へ-

スポーツクライミング

のぐちあきよ
野口啓代

ルーツは木登り

本気になる魅力

好きなこと追求

夢が背中を押す

父が牛舎改装 自宅に壁

「庭の木は数え切れないくらい。それでも、子どもの時に全部登りました」と野口啓代(29)は笑う。茨城県の実家は当時、乳牛約400頭を飼育する酪農を営んでいた。敷地は3万坪超。自然に囲まれて育った少女にとって、木登りは当

たり前の遊びだった。とにかく高い所に登りたがる。そんな姿を父・健司さん(54)もはつきりと覚えている。4歳の時、工事中で骨組みだけの牛舎の屋根に、はしごで勝手に上がったことがあったという。高さ約5層。「危ないぞ

っ」って言っても、啓代はニコニコ笑っていた。

「スポーツクライミングとの出会いは偶然だった。小学5年の初夏、家族旅行で訪れたグアム島のゲームセンターで、大木を模した垂直のコースを登るアトラクションに挑戦した。ロープをつけて10層を登り、「自分の力で高い所へ行ける感じが楽しかった」と野口。

木登りの進化形のようなスポーツがそこにあった。実はクライミングの魅力に強ひかれたのは、一緒に挑戦した健司さんも同じだった。ただ、酪農は休みが取りづらい。ならばと、100万円の予算で牛舎の一部を改装し、クライミング壁を自宅に作ってしまった。野口が中学1年の時だった。

「当時はクライミングジムなど少ない時代。グアム旅行以降、月1回程度のジム通いを父子で続けていたが、自宅に壁ができたことで野口も自由に登れるようになった。「だからって、毎日登っていたわけではありません」と言うが、環境が成長を促していく。コーチはいないため、登り方は我流だ。ノートに記録しながら、中学生の野口は黙々と壁に向き合った。クライミングは力勝負に見える。頭を使う競技。体をどう動かせば、壁を攻略できるのか。健司さんが言う。「小さい頃に自分で考え、解決する訓練を重ねたことが今に生きている。テクニックを覚える前に、登る力そのものを鍛えたのがよかった」(吉永岳央)



①6歳の野口。実家が酪農を営んでいたため、広大な敷地や牛舎が遊び場だった。提供：実家の牛舎を改装したクライミング壁を登る野口。父が作った壁で今も練習をする。



②クライミングの練習をする野口。自宅に改装したクライミング壁で練習する野口。

「小さい頃に自分で考え、解決する訓練を重ねたことが今に生きている。テクニックを覚える前に、登る力そのものを鍛えたのがよかった」(吉永岳央)

◆「未来ノート」スクラップブックは、全国のASA(朝日新聞販売所)でお配りしています。インターネットの特設ページではイベントやスクラップブックについて詳しく紹介しています。「未来ノート 朝日新聞」で検索してください。

©朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。